

## 論文

# 被服行動とライフスタイルの関連性

隈元 美貴子<sup>1)</sup>・柳田 元継<sup>2)</sup>

キーワード：被服行動，ライフスタイル，クラスター分析

**要旨：**被服行動を規定する要因には、感覚や知覚、感情や気分、パーソナリティや自己概念、欲求や動機、態度、価値観、ライフスタイルなどがある。これらは被服行動を説明するための概念としてみなされ、これまでに、こうした概念と被服行動の関係性に関する多くの研究がおこなわれている。しかし、ライフスタイルと被服行動との関連性にまで言及した報告は少ない。そこで本研究では、現代の若者の被服行動をいくつかのパターンに分類し、それぞれのグループごとにライフスタイルに違いが見られるかどうかを明らかにする事を目的として、質問紙調査を行い、検討を行った。被服行動を測定する 20 項目への反応を因子分析（主因子・プロマックス回転）し、固有値 1 以上の 4 因子を抽出した。それぞれ、「流行性」、「経済性」、「機能性」、「規範性」と命名した。次に、被服行動に対する考え方で対象者をクラスター化するために因子得点をもとにクラスター分析を行った。その結果、「流行性」が高い値を示す『流行追従型』、「流行性」「規範性」が高く、「経済性」が低い値を示す『TPO 重視型』、「流行性」が低い値を示す『流行無関心型』にクラスター化できた。次に、ライフスタイルに対する各質問の回答の分布を、一元分散分析し、多重比較を行った。その結果、クラスター間でライフスタイルが異なることが明らかになり、被服行動からライフスタイルの推測ができる可能性が示唆された。

## 緒言

人間生活の基本的な要素として、衣、食、住が挙げられるが、これらは、我々の生命を守るといった原始的な必要を満たすだけではなく、より社会的、文化的な生活を送るうえで重要な役割を果たしている。被服に焦点を当ててみると、我々が日常的に行っている被服に関する行動—購買、着装、廃棄—は、「被服行動」として定義されており、文化、社会、個人の 3 つの水準で大別して規定されている。特に、個人の水準で被服行動を規定する要因には、感覚や知覚、感情や気分、パーソナリティや自己概念、欲求や動機、態度、価値観、ライフスタイルなどがある<sup>1)</sup>。これらは被服行動を説明するための概念としてみなされ、これまでに、こうした概念と被服行動の関係性に関する多くの研究がおこなわれている。

---

<sup>1)</sup> 山陽学園大学総合人間学部生活心理

<sup>2)</sup> 有限会社 NTC 技建 人間・環境開発部

欲求と被服行動の関係に関しては、マズローの欲求分類により説明することができる<sup>1)</sup>。マズローは、欲求は階層構造をなしており、第一段階の「生理的欲求」、第二段階の「安全の欲求」、第三段階の「所属と親和の欲求」、第四段階の「尊敬と承認の欲求」、第五段階の「自己現実の欲求」、に分類できるとしている。これを被服行動の場面に置き換えてみると、まず、人は寒さから身を守り、生命を維持するために被服を着用し(生理的欲求)、続いて、外敵や危険な状況において、外傷を負わないように、例えば長袖のシャツや紫外線を遮る材質の被服を着用する(安全の欲求)。こうした低次の欲求が満たされると、次に、人並みの被服を着たいというエチケツ的な欲求に気持ちが移り(所属と親和の欲求)、さらには、集団の中において人よりもよい被服を纏い、人から認められたいという気持ちが生じる(尊敬と承認の欲求)。そして、それらの欲求が十分満たされた場合に、自己実現の欲求が生起する。自己実現の欲求とは、自分自身を成長させ、豊かにしていく欲求であり、被服行動でいうならば、例えば、デザインをする事から、それを着用するまでの一連の行為がそれに当たる。また、クリークモア(A.M.Creekmore)は、マズローの分類に加え、第六段階に「知識への欲求」、第七段階に「審美的動機」、第八段階に「アクションに対する欲求」を加えて着装動機の研究を行っており、被服行動における自己実現の欲求は、クリークモアが言うところの第六段階から第八段階にあたりと考えられる<sup>2)</sup>。

被服行動を説明するための概念のひとつの「態度」は、オルポートにより定義されている。「態度とは個人がかかわりを持つあらゆる対象や状況への個人の反応に、指示的あるいは力動的な影響を及ぼす経験を通じて体制化された精神的、神経的な準備状態である。」と定義されている<sup>3)</sup>。

この態度と被服行動に関する研究において、購買態度と被服行動について報告されている。被服に対する購買態度は、一般の商品全体に対する購買態度によっても規定されるし、さらには、保守的・革新的といった生活態度や、目的合理的、価値合理的といった価値態度によっても規定される。佐々木らは、購買態度の基本的次元を「合理性」と「情緒性」という二次元で測定する尺度を作成し、購買態度のプロフィールに基づく商品の分類を行っている<sup>4)</sup>。被服に対する購買態度も大きくはこのような二つの次元でとらえる事ができよう。また、中川らは *erc scale* 尺度を用いて購買態度を測定し、被服の購買行動との関連を見出している<sup>5)</sup>。

また、着装態度について、天野らは、若い勤労者を対象に、着装態度のタイプと被服行動特性の関係を検討している<sup>6)</sup>。その結果、ファッション情報への関心については、売場の陳列商品を注意してみる、他人の服装をいつも注意してみるなど身近な情報への関心が高い。そして、着装態度では、着心地や肌触り、動きやすさに加えて、場所がらを重視し、他人に不快感を与えない服装、清楚な服装を心がけており、服装は信用に関わるからおろそかにできないと回答するなど、社会性、容儀性を重視している。しかし、一方で、異性に魅力的に見られるような服装がしたい、周りに縛られず自分の好きな服装をしたいなどおしゃれへの関心が強いことが報告されている。そして、着装態度を他者同調流行追随型、おしゃれ軽視流行否定型、個性重視流行積極型、他者同調流行消極的型の4つのタイプに分け、流行行動や購買行動、被服費などにおいてタイプ別に差異がみられることを明らかにしている。

本研究で扱う概念である「ライフスタイル」は、ある種の文化もしくは集団の生活様式

を他の文化や集団の生活様式から識別するような特有な構成要素、もしくは性質と関係している。そして、ライフスタイルは一つの社会における生活の動学から発達し、現れるパターンとして具体化される。従ってライフスタイルとは文化や価値観、資源、シンボル、ライセンスとしての力の結果として現れるものである。一つの見方を示せば、消費者の購買の総計とそれらが消費される仕方、社会のライフスタイルを反映する。このような定義に従えば、アメリカ人のライフスタイルや家族のライフスタイル、消費者のライフスタイル、様々な社会階層のライフスタイル、そして、ライフサイクルの異なる段階に位置する特定の集団のライフスタイルについて語る事ができる (Lazer 1963)<sup>7)</sup>。

ライフスタイルと被服行動については、田北らの報告<sup>8)</sup>があり、学生を対象にライフスタイルを調査したところ、「いろいろな体験をしてみたい」、「旅行の計画を立てるのは楽しい」、「将来にではなく今を楽しく生きたい」の平均値が高く、いろいろな体験をし、旅行などを好む行動力的であるとの結果を得ている。さらに、「できるだけ多くのものと比較したうえで買い物をする」など堅実な生活志向が伺える。また、「家事・育児は女性に任せておく方がよい」は低いとのことから、家庭生活は、男女で行うことを望んでいると分析している。一方で衣生活スタイル項目は、「会社訪問にはリクルートスーツを着る」、「社会的地位や立場にふさわしい服装をすることは大切である」、「普段着を着てパーティ会場へ行かない」は高い数値を示した。また、環境にやさしく、着用感などを考えて健康を意識し、堅実で個性重視の面がみられた。しかし、この研究では、ライフスタイルと被服行動との関係性にまで言及していない。そこで本研究では、現代の若者の被服行動をいくつかのパターンに分類し、それぞれのグループごとにライフスタイルに違いが見られるかどうかを明らかにする事を目的として、質問紙調査を行い、検討を行った。

## 対象および方法

S大学およびS短期大学の学生を対象として集合調査法による質問紙調査を行った。実施時期は2013年12月、対象は日本人195名、回収数は193名で、回収率は99.0%であった。調査項目は、①基本属性、②ライフスタイルに関する25項目<sup>9)</sup>、③被服行動に関する20項目<sup>10)</sup>から構成されている。統計分析は、単純集計、因子分析、クラスター分析、一元分散分析をSPSSを用いて行った。

## 結果および考察

### (1) 基本属性の単純集計

ライフスタイルと被服行動の関係について明らかにするために質問紙調査を行った。回収した質問紙を精査した結果、有効回答数は141名で、有効回答率は72.3%であった。まず、対象者の所属学科の割合は、K学科が46.1% (65名)、Y学科が53.9% (76名)であった(図1)。次に、対象者の年齢は、18歳が22.7% (32名)、19歳が71.6% (101名)、その他が5.7% (8名)であった(図2)。性別は、男性が12.8% (18名)、女性が87.2% (123名)であり、大半が女性であった(図3)。住居形態は、自宅が60.3% (85名)、アパートが29.1% (41名)、寮が10.6% (15名)であった(図4)。出身地は、岡山県が58.2%

(82名)、広島県が12.1% (17名)、島根県が7.1% (10名)、沖縄県が4.3% (6名)、鳥取県が3.5% (5名)、その他が14.9% (21名)であった(図5)。一か月の小遣いは、三千円未満3.5% (5名)、三千円以上五千円未満8.5% (12名)、五千円以上一万未満12.1% (17名)、一万円以上二万円未満31.9% (45名)、二万円以上三万円未満16.3% (23名)、三万以上四万未満14.9% (21名)、四万以上五万未満8.5% (12名)、五万以上七万未満2.8% (4名)、七万以上十万未満0.7% (1名)、十万以上0.7% (1名)であった(図6)。

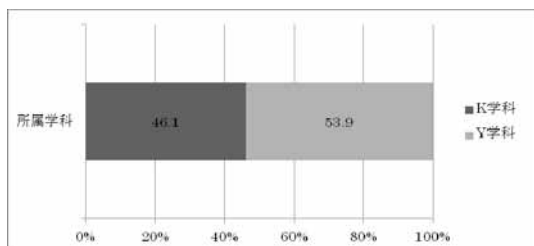


図1 対象者の所属学科

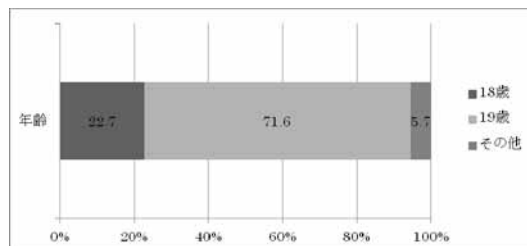


図2 対象者の年齢

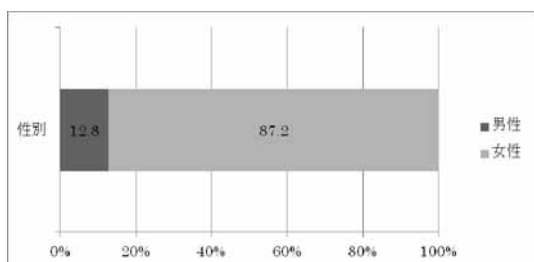


図3 対象者の性別

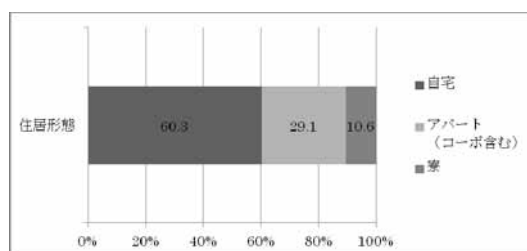


図4 対象者の住居形態

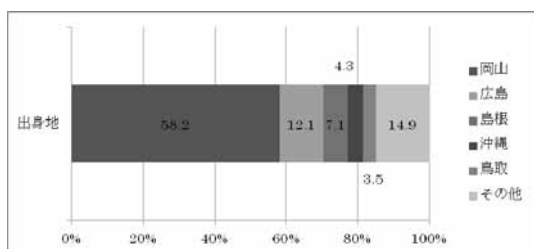


図5 対象者の出身地

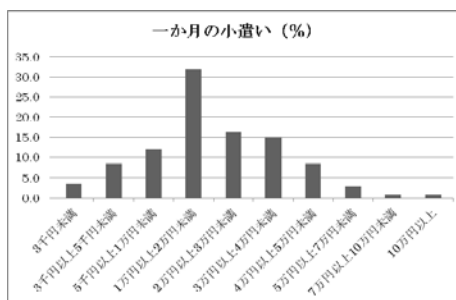


図6 対象者の一か月の小遣い

## (2) 被服行動の因子分析とクラスター分析

被服行動を測定する20項目への反応を因子分析(主因子・プロマックス回転)し、固有値1以上の4因子を抽出した。因子分析の結果を表1に示す。第1因子には、「最新のファッションについて知るために多くの店を見てまわる」、「最新のファッションを着るようにいつも心がけている」、「いまだのようなファッションがはやっているかについてよく知っている」「ファッション雑誌をよく読む」「周囲の人のファッションが気になる」などの項目の因子負荷量が高いことから「流行性」因子と解釈した。第2因子には、「衣服は百貨店より低価格なお店で購入することが多い」、「どんな気に入った服でも高ければ買わない」などの項目の因子負荷量が高いことから「経済性」因子と解釈した。第3因子には、「衣服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさを重視する」、「保温性や通気性の良い服を選ぶ」「華美さよりは機能性を重視して衣服を選ぶ」、「吸水性の良い生地 of 服を選ぶ」などの項目の因子負荷量が高いことから「機能性」因子と解釈した。第4因子には、「その場に合った服装というものは必要であると思う」、「人が場違いな服装をしているのを見ることは耐え難い」、「その場にふさわしい服装があると思う」などの項目の因子負荷量が高いこ

表1 被服行動因子分析

質問項目	FACTOR			
	I	II	III	IV
最新のファッションを知るために多くの店を見てまわる	0.779	0.012	0.109	0.056
今どのようなファッションがはやっているかよく知っている	0.761	0.017	0.088	0.141
最新のファッションを着るようにいつもこころがけている	0.747	0.056	0.146	0.090
ファッション雑誌をよく読む	0.703	0.026	0.054	0.153
周囲の人のファッションが気になる	0.503	0.245	0.239	0.178
衣服は百貨店より低価格なお店で購入することが多い	0.038	0.779	0.075	0.077
多少値段が高くても品質の良い衣服を選ぶ	0.041	-0.750	0.176	0.124
どんなに気に入った服でも高ければ買わない	0.021	0.654	0.048	0.058
保温性や通気性の良い服を選ぶ	0.018	0.055	0.722	0.083
華美さよりは機能性を重視して衣服を選ぶ	0.189	0.227	0.686	0.018
吸湿性の良い生地 of 服を選ぶ	0.191	0.114	0.672	0.112
衣服のデザインより着たときの動きやすさを重視する	0.052	0.300	0.507	0.038
その場にふさわしい服装があると思う	0.069	0.016	0.080	0.680
その場に合った服装というものは必要であると思う	0.118	0.013	0.095	0.573
人が「場違いな」服装をしているのを見ることは耐え難い	0.051	0.031	0.037	0.512
因子間相関	I	II	III	IV
I	—	-0.177	0.076	0.197
II		—	0.076	-0.008
III			—	0.113
IV				—

とから「規範性」因子と解釈した。

被服行動に対する考えの似たものをグループ化するために、被服行動を規定する4因子得点をもとにクラスター分析を行った。その結果、調査対象者を3クラスターに分類することができた。それぞれのクラスターの因子ごとの平均因子得点を図7に示す。各クラスターの特徴から、「流行性」が低い値を示すクラスターに「流行無関心型」、「流行性」が高い値を示すクラスターに「流行追従型」、「流行性」と「規範性」が高く、「経済性」に低い値を示す「TPO重視型」と命名した。

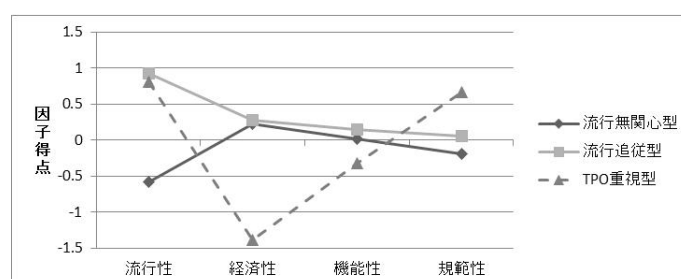


図7 クラスターごとの平均因子得点

### (3) クラスター間におけるライフスタイルの相違

被服行動で分類した3つのクラスター間でライフスタイルに差がみられるかどうか一元分散分析を行い、有意差 ( $p < 0.05$ ) の認められた質問項目に関してボンフェローニ補正のマンホイットニーの多重比較を行った。その結果、「TPO重視型」と「流行無関心型」の間で、ライフスタイルの質問項目「いろいろな体験をしてみたい」 ( $p < 0.017$ ) と「大学や会社はできれば一流のところに入りたい」 ( $p < 0.017$ )、**「流行（音楽・ファッションなど）についていく方だ」** ( $p < 0.017$ )、**「何かを買うとき常に新しい店を探して買う方だ」**

( $p < 0.017$ ) に対する回答の分布に有意差が認められ、すべての項目で「TPO重視型」が高かった。また、「流行追従型」と「流行無関心型」の間で、ライフスタイルの質問項目「人から注目されるようなことをしたい」 ( $p < 0.017$ ) と「スマートフォン（携帯電話を含む）がない生活は不安だ」 ( $p < 0.017$ )、**「流行（音楽・ファッションなど）についていく方だ」** ( $p < 0.017$ )、**「何かを買うとき常に新しい店を探して買う方だ」** ( $p < 0.017$ )、**「あまり人が使っていない個性的なものを持ちたい」** ( $p < 0.017$ ) に対する回答の分布に有意差が認められ、すべての項目で「流行追従型」が高かった。逆に、「友人といるよりは一人でいることが多い」に対する回答の分布は、「流行無関心型」の方が有意に高かった ( $p < 0.017$ )。さらに、「TPO重視型」と「流行追従型」の間で、「大学や社会はできれば一流のところに入りたい」に対する回答の分布に有意差が認められ、「TPO重視型」が高かった ( $p < 0.017$ )。

本研究において、被服行動の特徴によりグループ化されたクラスター間で、ライフスタイルが異なることが明らかになった。このことは、被服行動からライフスタイルの推測ができる可能性を示唆し、さらには、個人が望むライフスタイルに調和するファッションを提案するための重要な情報となりうると考えられる。

引用文献

- 1) 小林茂雄. “欲求と被服の着装動機.” 新版 被服心理学. 中川早苗編. 日本繊維機械学会, 2004, 46-48
- 2) 小林茂雄. “被服の選択動機と欲求.” 被服心理学. 日本繊維機械学会 被服心理学研究分科会編. 日本繊維機械学会, 1988, 19-28
- 3) 中川早苗. “態度と被服行動.” 被服心理学. 日本繊維機械学会 被服心理学研究分科会編. 日本繊維機械学会, 1988, 52-71
- 4) 佐々木土師二. 購買態度の情緒性と合理性に関する新尺度--erc scale の提案と構造分析. 関西大学社会学部紀要. 1984, 15(2), 31
- 5) 中川早苗. “ライフスタイル分析の実際.” “被服心理学研究分科会 研究発表会と一般公開講演会—ライフスタイルと被服行動—”. 日本繊維機械学会被服心理学研究分科会, 1987, 39-58
- 6) 天野好野, 白井佐代子, 中川早苗. 勤労者のライフスタイルと被服行動に関する調査研究(第1報): 勤労者のライフスタイルと着装態度との関連について: 愛知県内の若者における調査から. 家政学研究. 1991, 37(2), 86
- 7) Lazer, W. “Life Style Concepts and Marketing.” Toward Scientific Marketing. S. A. Greysen ed. AMA, 1963, 140-141
- 8) 田北智端子. 本学学生の被服行動について. 福岡女子短期大学紀要. 2008, 72, 1-8
- 9) 孫珠熙. 韓国ソウル市内高校生のライフスタイルの特徴. 日本家政学会誌. 2008, 59(2), 99-109
- 10) 永野光明. 被服行動尺度の作成. 繊維製品消費科学. 1994, 35, 468-473